



## シラバス参照

タイトル「**2012年度シラバス**」、開講所属「**教養教育(全学教育)-教養教育\_全学モジュール I -9. コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



戻る



参照URL

学期	後期	曜日・校時	月2
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20120586016901	科目番号	05860169
授業科目名	●コミュニケーション実践学 I (コミュニケーションとICT)		
編集担当教員	中村 千秋		
授業担当教員名(科目責任者)	中村 千秋		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	中村 千秋		
科目分類	全学モジュール I 科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[全]新棟2		
対象学生(クラス等)	教育学部, 経済学部, 薬学部, 水産学部		
担当教員Eメールアドレス	sonny@i.edu.nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	教育学部本館308		
担当教員TEL	819-2325		
担当教員オフィスアワー	月曜5限		
授業のねらい	<p>高度情報化社会を向えた現在、我々がコミュニケーションをとれる範囲が驚くほど広がっている。これは ICT (情報通信技術) が非常に発達したおかげである。この技術を用いたコミュニケーションは、時として国や社会を変化させる力をも持ち始めている。しかしながら、ICTを使ったコミュニケーションには、光の部分と影の部分が存在することも確かである。</p> <p>そこで本講義では、ICTの現況と課題を理解するために、インターネットの歴史と動向、情報通信の仕組み、情報セキュリティ、ソーシャルメディア、情報化の光と影等の内容を学習する。</p>		
授業方法(学習指導法)	各セクションごとに、個々に調べ学習を行ってきたものを、グループ討議を行うことで考えをまとめあげる。このため、毎回、予習および課題がある。		
授業到達目標	<p>高度情報化社会を支えるコミュニケーション技術を説明できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネットの基礎技術の概要を説明できる(基盤的知識、自主的探究、学問を尊敬する態度)。</li> <li>・インターネットの利用に関する問題と注意点を考え、説明することができる(基盤的知識の習得、自主的探究、批判的思考)。</li> <li>・情報セキュリティを守るための基本的な方針を行うことができる(基盤的知識、社会貢献意欲)。</li> <li>・知識共有サイトの仕組みと問題点を説明できる(自主的探究、批判的思考)。</li> <li>・ソーシャルネットワークサービスの特徴と利点、危険性について説明できる(基盤的知識、社会貢献意欲)。</li> <li>・調べ学習・グループ学習を通して、自己の考えをまとめ、グループで精査し、まとめあげていくことができる(実習的探究、行動力、日本語コミュニケーション力、自己成長志向、相互啓発志向)。</li> </ul>		
	ICTの現況と課題を理解するために、インターネットの歴史と動向、情報通信の仕組み、情報セキュリティ、ソーシャルメディア、情報化の光と影等の内容を学習する。		
	回	内容	
	1	・オリエンテーション ・インターネットの歴史について(1)	
	2	・インターネットの歴史について(2) ・インターネットの仕組みについて(1)	
	3	・インターネットの仕組みについて(2)	
	4	・インターネットの仕組みについて(3) ・ネットワークアプリケーションについて(1)	
	5	・ネットワークアプリケーションについて(2)	

授業内容	6	・ネットワークアプリケーションについて(3) ・情報セキュリティについて(1)
	7	・情報セキュリティについて(2)
	8	・情報セキュリティについて(3)
	9	・知識共有型サイトについて
	10	・匿名型ソーシャルネットワークについて(1)
	11	・匿名型ソーシャルネットワークについて(2)
	12	・実名型ソーシャルネットワークサービスについて(1)
	13	・実名型ソーシャルネットワークサービスについて(2)
	14	・ソーシャルネットワークサービスの比較 ・マスメディアとソーシャルネットワークサービスについて
	15	試験
	16	試験の振り返り
キーワード	情報システム ソーシャルメディア メディアリテラシー 知識基盤社会 ICT	
教科書・教材・参考書	教科書は特にないが、参考資料を提示する。	
成績評価の方法・基準等	予習課題・課題 50% 試験 50% 60点以上を合格とする。	
受講要件(履修条件)	毎回出席すること。	
本科目の位置づけ	モジュール「コミュニケーション実践学I」のモジュール1の科目	
学習・教育目標	コミュニケーションの基礎を学ぶ	
備考(URL)		
備考(準備学習等)		





## シラバス参照

LiveCampus

タイトル「2012年度シラバス」、開講所属「**教養教育(全学教育)-教養教育\_全学モジュール I**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	後期	曜日・校時	火2				
開講期間							
必修選択	選択	単位数	2.0				
時間割コード	20120586016501	科目番号	05860165				
授業科目名	●コミュニケーション実践学 I (コミュニケーションの生物学)						
編集担当教員	高橋 正克						
授業担当教員名(科目責任者)	高橋 正克						
授業担当教員名(オムニバス科目等)	高橋 正克, 橋本 優花里						
科目分類	全学モジュール I 科目						
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目				
教室	[全]新棟2						
対象学生(クラス等)	教育学部, 経済学部, 薬学部, 水産学部						
担当教員Eメールアドレス	takahasi@nagasaki-u.ac.jp						
担当教員研究室	教育学部新館2F(高橋研究室)						
担当教員TEL	095-819-2090 (Ext 2090)						
担当教員オフィスアワー	水曜日12:00~13:00, この時間以外は, 事前にメール, 電話等でアポイントをとってください。						
授業のねらい	本授業は前半と後半を異なったテーマで実施する。前半:ヒトは, 物言わぬ動物の行動や反応を通じてコミュニケーションを図り, 有用な薬物の開発や危険性の予知など多様な情報を獲得してきた。動物の行動科学を基盤に, ヒトが生きていく上で必要な健康や病気の治療に用いられる医薬品の開発等を学ぶことによって, 言語以外, 特に行動によるコミュニケーションの有用性を知り, 多様なコミュニケーション活動の基本を理解する。後半:ヒトのコミュニケーションにおける関連器官の構造と機能について学ぶ。とくに, 認知・感情・対人関係に深く関わる脳科学的背景に焦点をあてる。						
授業方法(学習指導法)	本授業は前半と後半を別の教員で担当する。前半は, 基本的に講義形式で行うが, できるだけ口頭による質疑応答を取り入れ理解度を探りながら進める。必要に応じて, ハンドアウトを配布する。また, パワーポイントを利用して理解を進める。後半の授業は集中形式で行う。講義を中心に行うが, 講義に関連した実験やアクティビティを随時取り入れる。						
授業到達目標	<p>前半:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>動物の行動や動物実験の意義を説明できる(基盤的知識, 自主的探究, 学問を尊敬する態度)。</li> <li>動物行動を通じてのコミュニケーションの有用性を理解する(基盤的知識, 環境の意義)</li> <li>動物の行動からヒトの社会科学への展開を説明できる(自己成長志向, 多様性の意義, 相互啓発志向)。</li> <li>調べ学習を通じて動物行動に対する自己の考えをまとめ, 行動分析から多様なコミュニケーション活動の意義をまとめることができる(自己成長志向, 相互啓発志向, 多様性の意義, 日本語コミュニケーション力, 自主的探究)。</li> </ul> <p>後半:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ヒトのコミュニケーションにおける関連器官の構造と機能について十分に説明できる(基盤的知識, 日本語コミュニケーション力, 自己成長志向, 相互啓発志向)。</li> <li>認知・感情・対人関係に深く関わる脳科学的背景を解説できる(基盤的知識, 学問を尊敬する態度, 多様性の意義)。</li> <li>コミュニケーション能力の発達における環境の意義を解説できる(基盤的知識, 学問を尊敬する態度, 環境の意義)。</li> </ul>						
	<p>コミュニケーション活動の基礎理解のため, 動物の行動の基本事項, 多様な行動機能を学習し, ヒトとのつながりを理解する。後半では, 人のコミュニケーションの特徴を認知心理学的観点から理解した上で, コミュニケーションの発達過程と障害様相について学び, より良いコミュニケーションに必要な要素を学ぶ。</p> <p>第8回目: 中間試験を行う。</p> <p>第1回~第8回 通常形式 (高橋担当) 第9回~第12回 集中講義(12月15日, 第2校時~第5校時, 橋本担当) 第13回~第16回 集中講義(1月6日, 第2校時~第5校時, 橋本担当)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>回</th> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>授業の進め方</td> </tr> </tbody> </table>			回	内容		授業の進め方
回	内容						
	授業の進め方						

授業内容	1	動物の行動(1) 本能行動, 動物実験とその意義
	2	動物の行動機能(1) 行動からみた動物の向精神作用とヒトの向精神作用
	3	動物の行動機能(2) 情動系 動物と不安, ストレス
	4	動物の行動機能(3) 報償系 動物が教える薬物乱用の怖さ
	5	動物の行動機能(4) 学習・記憶系 抗健忘薬・向知性薬
	6	動物の行動機能(5) 動物の行動毒性から学ぶこと
	7	動物行動と脳科学(1) 動物行動から見た社会科学へヒトとのつながり
	8	前半のまとめ, 中間試験
	9	コミュニケーションに必要な能力を考えよう
	10	コミュニケーションに関わる心理学的トピック—ノンバーバルコミュニケーション
	11	高次脳機能の発達心理学—胎児期・乳児期を中心に
	12	高次脳機能の発達心理学—幼児期以降を中心に
	13	コミュニケーションに関わる脳機能局在を学ぶ
	14	言語およびコミュニケーションの障害を知る—発達の障害
	15	言語およびコミュニケーションの障害を知る—高次脳機能障害
	16	試験およびフィードバック
キーワード	動物行動科学 行動分析 進化 社会化 神経現象学 神経生物学 ソーシャルブレインズ 高次脳機能	
教科書・教材・参考書	教科書は用いない。適宜, ハンドアウトを配布する。	
成績評価の方法・基準等	前半は, 中間試験(60%), 随時行う講義中の小テスト(20%)および授業への積極的な参加・貢献度(20%)から, 後半は, 定期試験(30%), 予習復習を含む小テスト(30%), 授業後半でのレポート(20%)および授業への積極的な参加・貢献度(20%)から, いずれも総合的に判断して成績評価を行う。前後半を合算して100%で評価する。	
受講要件(履修条件)	原則として全回出席することを単位認定の要件とする。	
本科目の位置づけ	コミュニケーション実践学を修得するにあたって, コミュニケーション活動の基礎理解のために, 動物行動学を学習するとともに, 高次脳機能の発達と障害を理解する。	
学習・教育目標	コミュニケーションの生物学的背景を説明できる。	
備考(URL)		
備考(準備学習等)		





## シラバス参照

タイトル「2012年度シラバス」、開講所属「**教養教育(全学教育)-教養教育\_全学モジュール I -9. コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



戻る



参照URL

学期	後期	曜日・校時	火1
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20120586016101	科目番号	05860161
授業科目名	●コミュニケーション実践学 I (コミュニケーションの比較文化)		
編集担当教員	波佐間 逸博		
授業担当教員名(科目責任者)	波佐間 逸博		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	波佐間 逸博		
科目分類	全学モジュール I 科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[全]新棟2		
対象学生(クラス等)	教育学部, 経済学部, 薬学部, 水産学部		
担当教員Eメールアドレス	hazama@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	国際健康開発研究科2階		
担当教員TEL	095-819-7894		
担当教員オフィスアワー	月～金17時～18時(事前にメールなどで確認してください)		
授業のねらい	異なる文化に属する者が出会ったとき、友愛の情や誠意があればつうじあえるだろうか。そこに、たがいの慣習的なルールや価値観、言語にかんする理解がかわれば、もう十分だろうか。出会うだけなら、それでいいのかもしれない。しかし、ひとたびおなじ生活社会にくらし、ひとつの職場ではたらくことをはじめるとすぐに、日常生活のあちこちでややこしい問題が生じる。文化人類学者という異文化のプロフェッショナルも例外ではない。そこには意識の外にあるレベルでの違い、コミュニケーションの実践の違いに由来する問題がある。そして、現代のように異文化接触のげい時代には、意識の下にある次元にたいする認識が大切だろう。本授業のねらいは、言語的・非言語的コミュニケーションの多様性と普遍性を、文化的・歴史的な諸事例をとおして理解することによって、他者との共生を可能にするコミュニケーションの実践力をつちかうこととする。		
授業方法(学習指導法)	問題基盤学習、ケースメソッドを活用し、他者との意見のすりあわせが要求される知的協働スキルやクリティカルシンキングをみがぐために、チームプレゼンテーションやグループワークをおこなう。学習者同士で教え、討議しあう機会の設定は、獲得した知識やスキルを活用させることにつながる。構造の自由度を高く設定したアクティヴ・ラーニングと、変化性ととんだ構成とすることによって、学習者がピアとの協働をつうじてみずから学ぶとともに、知識の吸収のみならず、むしろその活用と創造を重視した授業方法をとる。		
授業到達目標	コミュニケーションの多様性と普遍性への深い理解を手に行うことができる。また、それにもとづき、国際協働・共生の相手と対等な関係をむすぶときに不可欠な、倫理的な洞察を身につけることができる。私たちの日常生活につながる根源的で身近な問いを精巧に考察してきた社会的相互行為論をはじめとする学問領域を尊敬する態度や、その知見を自己超出・相互啓発へつなげる志向性をやしなうことができる。		
授業内容	ノンバーバルコミュニケーション(身ぶりとしぐさ)、バーバルコミュニケーション(会話分析)、共在のモード(集まりと身体接触)、オーラリティ(声の文化と文字の文化)といったテーマをもうける。それぞれのテーマの下、①導入 ②グループワーク ③グループプレゼンテーション ④まとめ、の4パートに分割して、授業をおこなう。		
	回	内容	
	1	はじめに	
	2	非言語コミュニケーション①	
	3	非言語コミュニケーション②	
	4	非言語コミュニケーション③	
	5	言語的コミュニケーション①	
	6	言語的コミュニケーション②	
	7	言語的コミュニケーション③	

	8 共在のモード①
	9 共在のモード②
	10 共在のモード③
	11 オーラリティ①
	12 オーラリティ②
	13 オーラリティ③
	14 総括
	15 試験
	16 フィードバック
キーワード	スピリチュアリティ、文化、近代化、身体知
教科書・教材・参考書	特定の教科書は使用しない。
成績評価の方法・基準等	試験:4割 平常点:6割 ・レポート(中間ライティング、期末ライティング) ・プレゼンテーション ・資料要約 ・授業フィードバック ・自己評価(作成した提出物についての自己評価)
受講要件(履修条件)	全回出席を前提とする
本科目の位置づけ	「コミュニケーション実践学 モジュール I」の中での位置づけとして、コミュニケーションの基礎をまなぶ。
学習・教育目標	コミュニケーションを社会・文化の側面から捉え、実践的スキルを高めながら知識背景を習得していくことをめざす。
備考(URL)	
備考(準備学習等)	

